

## 「戦後70年に想う」

中田 進（関西勤労者教育協会副会長）

1945年8月15日。正午、「朕、深く世界の体制と帝国の現状に鑑み・・・」この玉音放送を正座して聴きました。当時私は中国東北部「満州」の新京（長春）にいました。私の家にはラジオがあり近所の人が集まっていました。町会長さんが「負けた」と一言。小学校2年生の私は、その日の日記に「大日本帝国は敗れたり」と書いたことを覚えています。「神国日本は勝つ」と信じていましたので悔しかったのです。

「大きくなったら、天皇陛下のために死にます」そんな作文を書いたら、先生がほめてくれて、校門の掲示板に貼ってくれたことがありました。嬉しくて、夕方母を連れて校門まで。国語の教科書は「ススメ ススメ ハイタンサンススメ」。修身の教科書は「白い馬に乗った天皇」。算数の時間は「敵機が6機きました。4機撃ち落としました。あと何機残っていますか」、図工の時間は「戦艦の絵、戦車の絵」。体操の時間は、日の丸のハチマキを締めて、竹槍を持って、星条旗を巻いた藁人形にヤーと叫んで突き刺す。朝礼では「宮城（きゅうじょう・皇居）に向かって最敬礼」。三階建ての木造校舎の壁面に大きな世界地図が貼られ、日本がどんどん攻めて「陥落」させていく東南アジアの国々の上に日の丸の印が。毎日のように増えていく様子にみんなで大喜び・・・。私は軍国少年でした。

あれから70年。日本は平和でした。ところが2015年9月19日未明。「戦争法案」が強行可決されました。戦闘地域に自衛隊が出勤し武器を使用する「殺し殺される」国への大転換が。戦後70年という節目の年に「違憲」の法律を、国会のルールも大規模な反対運動も無視して安倍内閣は強行しました。また戦争する日本に・・・。なんとしてもこの流れを阻止しなければと決意を新たにしています。

戦後70年の今年、多くの人々が重い口を開き「戦争体験」や「歴史の真実」を語っています。私も「語れる一人」として語ります。

私は3歳から9歳まで中国東北部「旧満州国」で育ちました。当時を語れるのは姉と私だけ。二人の弟と妹は「記憶」していません。かろうじて「記憶」を語れる私には、いま可能な限り「体験」を語る責務があります。当時の実体験を語る機会がありませんでしたが、このたびの保存会ニュースがはじめてです。

父は敗戦の直前に応召があり近くの連隊に入隊していましたが、8月15日の天皇の放送の直後に、隊長の判断で「家が近いものは直ちに帰れ」と命令したため父は直ぐに帰ってきました。ほとんどの隊員がソ連兵に連れられシベリアへおくられ過酷な抑留生活を強いられました。60万人ちかくの日本兵が抑留され、6万人近くの命が奪われたのです。父は幸運にも抑留から免れたのです。満州・蒙古の住民に「融和」の仕事をする

る「公務員」であった父は敗戦とともに失業します。もともと日本の京都にいた頃「豆腐屋」を祖父と営業していたので、直ぐに必要な道具を集め「豆腐屋」を開業しました。『祇園豆腐』と看板をあげ、おいしい豆腐がたちまち評判になり電車に乗って買いに来る人も。

ところが秋に突然「戦争」が始まりました。八路軍（毛沢東）と国民党軍（蒋介石）の激戦に直面しました。道路に面して「豆腐屋の店」を出していましたので、「邪魔だからつぶせ！」国民党の兵士が命令。大急ぎで解体し大切なものを50メートルほどのところにある自宅にはこびました。銃撃戦が始まり、ヒュルヒュルと銃弾が飛び交う中を必死で走りました。戦時中に造った防空壕を「豆腐作業所」していたのでそこに避難しましたが、父一人、八路軍の兵の命令で家の中に残りました。深夜、近くで迫撃砲が炸裂しました。母が「お父さんの命がありますように祈りましょう」といい、みんなて手を合わせました。ようやく父が駆け下りてきてみんなほっとしました。一夜が明け、砲火も静まり外へ出たら、爆風で我が家のガラスはすべて破壊され、扉もとんでいました。街が破壊され、兵士の死体があちこちに。凄まじい光景にショックを受けました。

秋も深まる頃食べたものが悪かったのかお腹をこわしました。何日も下痢が止まりません。一日何回も。母がおかしいと思い便を調べたらなんと「血」が。赤痢の疑いが。「豆腐屋」ですから極秘にして、私を一つの部屋に隔離し、私に触ったあとは徹底して消毒。汚物はペチカで燃やし処理しました。下痢が40日も続き骨と皮に。水も受けつけなくなり、親族一同枕元にあつまりました。それでも母は「この子は死なない」と必死で看病してくれました。たまたまインターンの若い医者が薬を見つけて持ってきてくれ奇跡的に回復。私の命を救ってくれた母にほんとうに感謝しています。

敗戦の翌年、突然「第二次引き揚げ」の通知が。大急ぎで準備し1946年7月14日、新京を出発しました。母は敗戦の前日、1945年8月14日に産まれた0歳の弟を胸に、大きなリュックを背に。小学校3年生の私も肩にくい込むリュックを背負い、必死で歩きました。天井も側面の壁もない「板」の下に車輪がある危険な「無蓋列車」にのせられました。列車から落ちないように周りにリュックを並べて縛り、トイレは隅に樽を置き、女性が用を足すときは布で隠しました。中国から日本への引き揚げ船の波止場は葫蘆島（ころとう）でした。波止場に引揚者が並べられ、リュックのすべてのものを並べ検査を受けました。頭からDDTの粉末を吹きかけられました。引き揚げ船はアレキサンダー・J・ダラス号というアメリカの大きな貨物船。客船ではないのでタラップもなく細い梯子が側面に取り付けられ、必死の思いで乗船しました。船内での食事は一日二食。午前はカンパン二つ、夕食はコウリャン。それでもそれが唯一の「楽しみ」でした。船室はなくがらんとした貨物船の地下倉庫に何百人もの人が詰め込まれました。当然祖国に着く前に亡くなる人も。二日に一回位の頻度で「水葬」が。重しをつけた箱に遺体を。ロープでつるし静かに海に。ポーポーと悲しげに汽笛が鳴りました。

舞鶴港に着いたのに伝染病の検査で一週間も下船できず。ようやく下船して故郷の京都に帰ってきたのに、「乗船者の中でコレラの患者がいた」、「感染の疑いが」とのことで、京都の伝染病院に一週間も「隔離」。強制入院・検査検査の毎日でした。無事疑い晴れて京都の親戚の家にしばらく世話になりました。母の妹とその子、祖父と私たち親子7人の計10人の大所帯が突然入り込み親戚も困っていました。

左京区高野川の陸軍病院が引き揚げ者の寮となり、9月からそこで戦後の貧しく厳しい生活が始まりました。この引揚者の寮については『京都左京の15年戦争』（監修・鱈坂真・井口和起・原田久美子。かもがわ出版）という本に私が一文を書いています。

一つの家族の「家」として一つの病室が割り当てられました。病室ですから水も台所もトイレもありません。50メートルほど廊下を歩いて共同便所、共同炊事場へ。部屋は天井から雨漏りが。ノミや南京虫がいて、頭には「しらくも」という皮膚病が。なんとも貧しい暮らしがはじまりました。

でも兄弟姉妹5人と両親、祖父が無事帰国できたことがせめてもの幸いです。満蒙開拓団の悲しい映画『望郷の鐘』や残留孤児を描いたテレビドラマ『大地の子』などは「わがこと」のようで涙なしには観れません。ほんとうに「生きて帰れてよかった」としみじみ思います。二度と二度とこの歴史を繰り返してはなりません。

（関西勤労者教育協会の保存会ニュース原稿を補正）